

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）＋ 奥井 遼（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員）

■ワザ学研究分科会「世阿弥伝書を読み論じる会」

京都大学こころの未来研究センター225会議室にて、毎月2回、河村博重（観世流能楽師、京都造形芸術大学客員教授）氏を交え、世阿弥の書き残した「伝書」を用いて、ワザを言葉によって記した世阿弥の思想および文体を読み解くことを行ってきた。

2011年度は、『花鏡』『至花道書』『申楽談義』の講読を行った。精読を通じた議論によって、世阿弥における理論家・実践者・興行主としての多面的な語り口を分析することができた。

また、注目すべきトピックとして「世阿弥とオノマトペ」が挙げられた。謡曲のみならず伝書においても反復表現を用いた文体が散見される。伝書における「反復」を検討することは、世阿弥の文体を理解するための1つの糸口として提示できよう。

■研究会

「ボディーワーク研究ことはじめ」

2011年5月16日、京都大学こころの未来研究センター小会議室2にて開催。

発表は井上ウィマラ高野山大学准教授「テラワダ仏教におけるこころ観とこころを制御するワザについて」、熊谷誠慈京都大学白眉プロジェクト助教「チベット仏教におけるこころ観とこころを制御するワザについて」、指定討論は魚川祐司氏（ミャンマー・テラワダ仏教僧侶）。

瞑想の実践の分類と概要について報告を受け、今日のボディーワークとして活かす道を探った。報告によれば、瞑想はその内容によって40種類に分けられる（イメージする、死体とその腐敗する過程を見つめる、呼吸を見つめる、四無量心〈慈悲喜捨〉、食物摂取に関する厭わしさを想う、身体の要素分

析〈地水火風〉、非物質性〈空間の無限性、意識の無限性、虚無性、非想非非想〉を想うなど）。その技法瞑想の実践における今日的意義を論じるための素地を固めることができた。

また、チベット仏教における「こころ」の概念を検討することによって、7世紀以降、北部インドでのみ盛んであった仏教諸学派の理論を効率的に整理しようと努力し、その中で、説一切有部、経量部、唯識派、中観派の順番に仏教哲学が深まりを見せていく、その形成過程を検討した。チベット独自の認識論は、こころを練り上げていくワザの諸相として意義深いことが示された。

第2回研究会・ワザ学研究会・負の感情研究会合同研究会

（詳細は「こころ観」報告書を参照）シンポジウム「沖縄・久高島のワザとこころ～その過去と現在」

2011年11月24日、京都大学こころの未来研究センター大会議室にて開催。

大重潤一郎（NPO沖縄映像文化研究所理事長・映画監督）監督作品「久高オデッセイ 第二部 生章」（70分）、「水の心」（30分）上映後、大重監督「久高島のワザとこころ」、須藤義人沖縄大学専任講師（映像民俗学）「沖縄の民俗文化・祭祀芸能文化におけるワザの伝承について」、坂本清治久高島留学センター代表「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」の発表。指定討論はやまだようこ京都大学教育学研究科教授（発達心理学）。

「神の島」と呼ばれた久高島における祭祀の歴史的意義と現状、および久高島における山村留学の取り組みの紹介を通じて、久高島の暮らしの意義深さと苦勞、ひるがえって、現代社会のあり方に対する問題提起を得ることができた。

「地球儀を少し回転すると京都ではな

く沖縄が東アジアの中心に位置する」という大重監督の発言からは、近代の都市国家についての価値観を転換させる発想を、「人が人とすり合わせをするというか、付き合い、ぶつかり合って、初めて人は人になる」という坂本代表の発言からは、今日の教育における自然との付き合い、人との付き合いのあり方を問い直すきっかけを得た。

■フィールドワーク：能舞「弁財天マリア」「宇宙」

2011年3月21日、東京自由大学主催の春合宿（関西セミナーハウス）にて、能舞「弁財天マリア」の実演を行った。鎌田の法螺貝やアコースティックギター、歌唱に合わせ、河村博重師が翁面や女面を用いて舞った。震災の影響も冷めやらぬ中、苦悩や希求、慈愛の表現が強調的に感得された。

2011年6月7日、JAXA - 京都大学連携パネルディスカッション（沖縄・コンベンションセンター）にて能舞「宇宙」を披露。最上の衣装を用い、上演中に2度、冠の付け替えをするなど、異例の演出。「影向の松」ともつかぬ月面映像により「この世のものでなさ」を現出。複式夢幻能の二重の世界が月面と地球に対照され、「我見（この世）」と「離見（あの世）」を「反映」「循環」するような舞を創作した。



能舞「宇宙」